和朝

今昔物語

巻十九

怪異部

今昔物語 倭部 十五目録

○怪異傳

一 加賀國人渡猫嶋助大蛇討蜈蚣語
二 播磨國印南野妖怪語
三 以人為馬語
四 佐渡國人為風被吹寄不知嶋語
五 能登國鬼寢屋嶋語
六 習外法男語
七 狐為女童乘馬語
八 過鈴鹿山人宿不知堂語

文明文庫

九　越後國被ㇾ奇ㇾ小舩語
十　狐化ㇾ杉木ㇾ被ㇾ射殺語
十一　飛騨國男退治邪神語

○怪異傳

一　加賀國人渡猫鴻助大蛇討蜈蚣語

今昔加賀國ニ住ル者。七人常ニ海ニ出テ魚ヲ捕テ業トシテ年月ヲ経ケリ。ソノ比海賊ノ出テ来レバ。皆ヒレ伏テ物ヲ乞フ。アルトキ海ニ出テ七人一所ニ乗テ漕ギケルニ。アルトキ大風吹キテ。ヒタスラニ吹キ流サレテ大海ニ出テヒタスラニ流レユク程ニ。大きなる島ニ寄ル。ソノ島ニ上テ見レバ。人ノ気ハナシ。ヒタスラニ奥ノ方ニ入リテ見レバ。

後人をあつらへ給へ。さて十年が程よりて、一人の男の
さとびたりけるが、遠くあめまくに、甚く荒き風吹くに、
こゝはたゞやとて、弱人ども引ぐして、我くは
今朝沖へ出でらむ。ひうけざる風よりなほさ強く
吹きてゆくに、此船をうちつけてよりつゝびゝ
なみ打ちぬと言へば、男いとく甚大風い強くせつる也。
ひとで飢えぬるゆゑ、甚い物打ちくひて、己れ漕ぎつる方よ
りしくよりぐれば、ものもぐ家人とうたて、長櫂二つ荷
ひ来り。櫂をもて打ち叩くに、櫂をひきさゝれ、
櫂妙の人名物なり。取おしてくいしるみ。弱人ども

終日飢えぬれば、酒のみて強きる物と
べ明日の料ふとて、長櫂よりくかさねて、荷
ふる者どもは帰りぬ。さわぐのちなれば男近くより来。
今日甚遠と思ひゆくに、見てより漢の方に流れ
ぬるのを我を殺して、此鴻と領をせんとぞ。
甚く強くて、粮手なり。明日甚く強くなれば。
なぐいよいよ荒れと荒しぬ。甚かれ男ども
ひとぐと思へけるとて、弱人どもいくよりて
頭をぞさゝ来りたりしぐし。かく来あるとて、人に捨て
へ人ぞ。さてこの長櫂の

男、紙を取て、[illegible]、[illegible]、[illegible]

ふとおのれらはしることあれい。
すれて。頭より尾までなれあるがごとく射立てゝ力を
極くはなはだしく紙切るあそび倒さねばならぬ。大蛇いひ
さとされて言入へらば。弱人どもいとく蛭虹とかころ
して。この本紙代りをそこれを焼。其所岩紙にをく
捨ろうぞのちらくべくみりて。伴の男新り血気を
ろれなぐ。如地あ〜ぎふとてうぐ来くいくまれ
其逢の浮徳よんく。年来の雙紙とちろだしぬ。
その市ぐ〜ひとれぐて。此時より田畠よ始べ美所
ちらくうくうく竹木牧とこうべ。魚鳥牧ぐし。幸ひ

ふれて大蛇ありあるる。此時よ来りて住みてこいて。弱
人ぐ〜いとうきて〜き来よい作れども。妻をべいぐ
仕ぐべきとこいべ男それをべいぐ
弱人たいてあるて流とべきさと尋ふ。男ありた流を
りは此方の風紙ちやくれくさようれたに
来ろこい加賀國熊田宮 延喜式神名帳曰加賀國能美郡熊田神社 とまり
きべ。此方に来ろありと行ってく。道の程合とべきの。
彼り入ちやく漕出ってれべ。始ちあるて風来く。
行ちくなれてうまる。七人の番。己ぐ家よ出ってそ。
ふ〜ぐ。後新相奥〜。物語ぐも。原葉ちと熊田宮ぐり

詠くまのようとよとて船くーまて出ぬるに風
まて七般乃船ども。伴の物ども船よりおりぬ。七人の
者ども其物よりはく。田島紙作り長いろごろ人多
く成ぬ。人にわらわり。其物の名紙猫物といふ。其物
乃人年に一度かの国より渡りて。熊田宮とまふす。
げく夜半ばかり来ぬ。ゆく帰りて。例乃
ものにたちてぞとこそあるめ。其祭毎年のりて今
にたえずとぞ。其物いい物登国羽咋郡。大宮
大海といふ所。晴る日人ゆきいたれども。
あるに者ども。ありて人物乃。去比物登国に常定

といふ梶取ありけれて彼物よりまうれて物乃者
ども来く近くいよせて。岩に船つけて。食
物紙ありて七八日許ありしほの方より風吹いで
われぬ。とーつも帰く。能登国より。彼梶取の
ありしいかのうれしてに。其物ものは人の家多く作
うさ。家ども。家ども小路とそうろう人乃ありぬ
事数ありきぞいいける。近来もまうれる唐
人ども其物よりて食物紙まう。鮑魚かど
ありく。其物より敷賀よ出ぬ。人物紙まう。
上 播磨国印南野妖怪語

今へむかし西国より来る僧いとよろ男ありけり紙ゆかつぎ
てよりけるが播磨国市川の辺にて日くれぬれば
宿をもとめあるきまはりぬ。向寺姫のかたに庵の有
と見付て今夜だにいちにちくわうさまして這入て
やすむに居ぬ。夜ふけぬれば行くかのふかい所の方より
金鈴ゆりて念仏して来る音聞。男あやしみて来る方
とうかがへりてれば世わかくの人世紙にてつまて俗ども打
伴ひて念仏と唱へて来る。葬送なりと見て皆
くわれば此男が居ぬる庵より三丁ばかりなる所に死
人の棺とおもわく葬送と聞て下方ども多く

来て墓所築きて上に卒都婆をたてく各うちぬ。男
おもへらくきはめて墓の方にはこれば此墓をこぐ板
をもて解月をてらしてこれを。ちきりにうちたる。
土紙をばらてけばうちなる者はたちあく。身ふけなる土と
ちらいあがる。庵よりいてみれば男ばかりなる
い。葬送の所なれば必鬼あり。其鬼の我をとらんとて
来りてこそ此庵いたりけれ。いかにせんとおもへ
ばしばらく紙板をもて結ぶ。彼鬼来りて
庵をいかんとすれども。かぐのごとくなれば
ぬりてはよりて紙板をもて結ぶ。男い御ぬしの

をばうち捨て逃て行て人家の門脇より内へ
入よあらんとせしに其郷の人いざ
行くこうんとて男女さわぎよりて行こうん若お葬送
て一所よりに墓も幸都婆もなくして大なる穴を切
こうして葬る仏程の男が庵より出る法師たちくだり
さんとしてきこゝに捨てこうものをんと。法師人こうも也

三　以人為馬諸

今はむかし。仏道をねがふ僧三人。四国辺をめぐりこゝろ
ざす。道にこうみ陸よりして。海にこうて入くこうあるこうの程よりこゝろ

らざして人家より行こうあり。怪しびて其家の主をよびて物
さんとこうへば。屋の内より主そこに向。思い侘る法師去
乃。道に如こうに遠て来こうる也。道に教へまとこうて内より
六十銭の價こうれこうに入まくこうて。三人こうもん板敷のこうよ
呼のこうせ。飯をこうくいをこうて後。こうに多けばおのゝ
ちこうは師来こうしよ。例の物こうもれこうくいば答と書
こうに云ふ者をこうこうれ侍例の様こうせこうくいば。一人乃
俗行者と板敷こうこうをこうに引こうして。答に云こうて
曰こうに十おくこうにわこうせいば。こうこうに此こうは馬こうに成こうく。所
ぶこういこうて立こうと。裏こうとこうくいこうこうこう

二人の修行者ふまんにてすがもうをつどぞ法にれてむ
處をぞ二人を座よりうくく答紙見てぞ今一人の
修行者。手を取て申さるに我をたとけまへと白平に
念じけまば。佛の法加護してやかりきんぞの修。其
修行者とば先そのまくに指をしていて居さるを
さるぞは師と呼くぐしろれ用よ水にあるやうとと
いへば作さりに修行者こひさるにぱにかりてもあげ
出そも同じくさるぞ千にてものぐれるもも
さてあまぞ入をばふまんとさしてぞまんのぶは
あつじあくく又六所にあんとさるよ。この家あるその

弟よ女二人さるしぐいつるる人ぞと同ば修行者さる
くの事ばくば身をあげてもあんとしてあるり作さり
たとけさせまくといつよ。げよさるれるあんぞるも
して為とけまるとば。四まに其れいつる法房
の天むすあり思さるんぞるぐ妹をるてり
うま紙そのそて為とけばべ思さるぞそそくく
むくませ。消息紙まるやんといて書てさるて
いくく。二人乃修行者をば馬よりてさる紙ば出よ
うぐさくさるんとする所り四よ水やあるとさる
さるは穴とさるんが法いさるはいとと

とゝべ修行者清水をとゝ者ゝて。女よりもしたゝ流く
拾ゝてゝつゝまおゝゝはゝる方へ廿町ばゝり行ばゝ乃
うゝゝふ家あり。ゝゝとゝて人をよび出して清よをなん
ゝてけゝをゝ取次の人門へ入ゝ帰てゝこれゝゝ入ゝ
とゝゝべ修行者入ゝ。女房出て対面していゝく婦ゝ
ゝくゝゝのゝゝこゝゝゝまゝゝべ食ゝゝ出ゝゝけゝゝゝべゝ。但ゝ家
ゝは世ゝゝゝゝゝゝゝき事ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれて
ゝゝゝゝゝゝゝて。一間ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いらるべきにあらずとて、ものもいはでうちあはせたりけるを、
ちらと彼行者の面をみて、ものもいはでうちうなづきて
うちうちやりたり

四　佐渡国人為風被吹寄不知国語

今はむかし、佐渡国の者あまたこの船に乗りて海をわたる。漕中にわく風に
きびしく吹の者ども今はいかにせんとしらず。船と川上に
風にはやせてわく行程に、この船に乗たりける
物ぬしの人出来たり。男にもあらず童にもあらず頭
を向き絵紙のごとくにて長きにあらず高
くてうしげ成なるべし。さてこの紙をもてこの人乃寄
来りて船に向。我等は佐渡国の人なり
が紙を取て見よ。値くべしとて此物よりこの紙
をとりて此地よりのぼる事なれば
ぐるべきなり。今物ぬぐ紙あるべしとて
て入れ出でぬ。さてかの人の国に大男十人ばかり来
まうで。我の人どもこれをみて是は鬼にこそあるらめ。
彼等が體とるに其力量たしかにまさりたり。
四人とおぼえたり。物の者ども寄来りて
あらべきなれども、よりてはいかさまにせんずらん。

うしをうつくしがりて。風をかうかをも。
甚かすり中間より帰ゆくべとしてそ不動ありつるめ
と。羊既に紙打をくくりむ。不動といつるのい羊
既ちへきいろく大ちり。此時しそいは二色と合わ
くてゐるちりこぞいろ。黒ちいろ。黒ちいあ
らばして。神をぞりもやをきんてこじいはもも同じ
うりうしども。長のうれい似ぞりうり。此羊いて近
き幸ちり。佐渡国より帰るゆきをりをみと語
はしへうとも也

五　能登国鬼寝屋嶋の語

今昔物語集巻十五　十三

今昔、能登国の奥に鬼寝屋といふ所あり。其屋に海人共の鬼寝屋に入りて、魚を取りて、河原の石の如くに、鮑・栄螺あれば、其屋に取り入れて、浦もあり。其浦に住む海人共、鬼寝屋に入りて、魚と栄螺・国司に年貢に奉る。其浦より鬼寝屋に行く程、一日一夜ばかり行くに、猫多く有り。鬼寝屋より猫多く出でて、一日一夜の浜海にあり。もろもろの猫、海人共の家ごとに入りて、海人共の家に入りて、魚を取りて帰るに、鮑一方を国司に奉るに、四十人一度に取りて、其鮑の中に、いとゆゆしき物、もろもろ藤原通宗朝臣、能登守任じたる年、其浦の海

人どもの鬼寝屋に入り帰りて、国司に鮑奉りけるに、海人共、越後国に帰り来れば、其浦に人多くありて、鬼寝屋に入りて鮑取りて、国に奉りけるに、一度に多く出でたりけるに、一つをば、えとらざりけるを、後に、海人共、

六　習弁は男語

今昔、弟子に成りて、ある下臈法師有り。陳ずる所ある男、此の法師を、いとくびるやうに、人よばるる事、いとくびるやうに、男、今は法師なりとて、

けどい。七日精進さとくは師男紙つきて
この中を行よ。己の紙ぞうの家ぐ。中にぐはく
つくる僧坊わるめ。そこ。内より陸奥と引ひ。
出るに人あり。男ぞうに長ぞうに僧のぞうげちる
ぞう。法師宮ぞうにやけ人仕んとに男仕せ
ぐ。ぞうれぞうよべとぞうつよ。男柴垣の色に居れば。
ぞ伝真男のぬぞうぞ力けぞうぞ。ぞれとぞ
ぐ。若僧ぞうぞ男ぞうぞうぞとけぞんとするに。
ぞうれぞうぞうけるぞ紙掃ぐ。ぞ。ぞうれ。老伝
ぞうと失ぞうのぞれぞうれぞ坊ぞ。ぞ。ぞ思

いぞうぞうぞけどい。ぞ。ぞ。ぞ

踊れりて物にぬく迷ふる。茂くちりとはなれ。其はは
滝口乃本有ふ。滝口ども集りてのろ揚川に女童が
てふ紙いい出しけるふ。ろさ滝口ときみ出く。我い其
女童をかくしてくべし。人乃はくろくてみづけたこて
といふ。滝口どもいや搦め得まじとつくべ。明夜ろれど
かくしくいさ来んとと約と。其翌晩よりくうの滝
口馬に乗くろ揚川より行て陸ふ。女童をとてわび。
引返して来れ方へ来るふ。女童をおて。其沙馬は尻よ
乗てあくとつくべ。滝口いばらくゆくんぞと問ふ。あく
はうろ。月乃光ものもとび沙馬の尻よ乗て陸うんと

杉ふちりとつくべやとて。其本ちりとて馬に乗て。う
て用意しろ指縄をもって。女童ど腰を結よゆいつを
本約程は用れり。一条紙東より行て。西大宮紙とて
見れば。東より北りくのゆとをとりて車どもやりはぎを
て来れば。滝口うとて西大宮紙ちりに二条西ぐ行て。
二条より東より紙。東乃大宮より土御門まて行ち土御門
乃内て西くとつの新ろば。後者どもやあると問う。
皆作とて十人ばろ出。付。女童紙ゆいつをる指縄
とて。引出ろ。門より入く。前よ火をとべ。本有
ろ。ひさ紙名れば。滝口ども出く。沙ろみ矢をとげて。

中にとりてとりつべきものとりれば、そこれせべば、女童、狐ども
ちりてこうくに逃げぬ。滝口、共も、後者もうさ
けもなく、光なく、史も清く、暗くなりぬ。紙をばりて
又あるべきにも。鳥部野の中に立ちぬ。西大宮より
ちがうとこしの家に来れるなり。一条にて史、馬
ていつる人も、狐のわざなりとぞいひける。ちりとて
京べき事にあらず。狐まだうふ者よ作て出ひ
ぬるなりけり。今夜、狐よりおどおど
ば、逃げさべき事にて。後者あまた具して馬に乗て。
京湯川よりてけるふ川をとよ女の童をとらせたく。

馬の尻よりのんとりてみのきて、弟の中に指縄をとりて
たくゆいつけて、一条に帰りたりければ、後者よ
史紙をばさせ、ちりとて、ちりをて行よ。一人もあ者。
土御門にて馬より下て、髪をあく中に入て、滝口
どもたちをうち、出家の強く縛りてこれば、狐
こそ人にて有をれいてくせあるに狐よりなりける。
後者の史をとりつくに、毛と焼く、養育をとりて、
射く。今ちりとれば、ちりかせそこいてこうとびて
てあるちりをれべえあやまちりをれしぐ。御逃げ出
ちりぬべきこと、洪滝口。おとうとに秘く名を知れた

行ぶ所にもあらぬ所にうくめてうろめきたんぞうろ
つきたり

八　過鈴屋人宿不新堂語

今は昔、伊勢国より近江国へ越ける。つる紀男三人
あり。鈴屋と云ふ所にて、その国に鬼の住むといふ。
人の宿をも舊堂あり。彼三人共男夕方よりして、
此堂に入て、寝い鬼の住む所にて、寝ぬ。狐狸なる
べしとて、ねられぬ。三人の男ども、畫過し
て、中に成しる男あり。其紀鞍ろて、ねんゆと
いへど、一人の者いでらく、あてどもとべしとて、ぞ
ちて出ぬ。今一人の男も、又裸にめて、さらりめ
ぐらく、死人をらて、公へ捧。其後より、ひく行ぬ。
家の男、まく、死人のうろに、ひるる男、公負んとす
る。負れしる男、負てる男乃宿をたくしくれば、
くてる死人といひて、捧負くうて、堂の戸に行よ
ぬげ捨て、紡束のごく、家に負くまうといふ。
堂乃内に入る間に、負てる男、みげ去てうぬく
て、堂より出くて、死人、早く逃てる奴れと
いてく、負れしる男、まくわくと語て、
物はるるは如しとぞいひる。三人の男乃魂、いづくて

とくれうせいこんをぐ。孔人よりのいはゆる者
なんぞ行て貧乏なるいなり紙海をわたり。此二人れ神こぐ
出くゆきさる間。堂の天井組人の子より板く
の新どの紙けり。おしけきぐも。此男子神もさんぐ
ざるをり。是い狐狸をぐの所為にてあるか。さる所
を人の見ていひ伝てるるや。堂に一人残りしる
男れ魂も抜ぬるぐりり。後明るれば出く。近所の
方へ申しれるとなり。信仏人くるる也

九　越後国被打寄小船話

今いにしへ。源行任朝臣　高雅子　越後国守にてあるを

ゆる付越後国。字滅。那の浦よりふる新らしきよりれる。
廣さ二尺立す。深さ二す長さ一間ばかりなれを
ゆる人ゆるる者乃そりれよはるて海ようく
あるかく打ものてよくれば。舷り梶紙の則る
ありげよも人の系ある紙なり。此何ものゆる小人の
系ある新ゆるあるん潜んとれい蜆乃ものに
ゆるをかるゆ。無ゆるべしさ物ありて。鎖よ打
しゆば。寄もいみぐくあやしゆるゆる。年をる者の
いひるいゆ。あるもゆる紙小新ゆることあり。此紙ものの
狐乃人ある法いの方よ在べし。此く越後国よい義さ

寄ときけども、ふねの中よりも見ざりけり。京にのぼりて、即ち子どもをもつくりてなん。

十　狐化杉本被射殺語

今いまは昔、春日の司中臣某ぞ、摂津の国にくだりて、住吉の郡に、杉本といふ所に、家造りて、妻子ども、下人ども、数多ありけり。

中に、某、後者一人を具して、狩倉に出でたりけり。中に、某、後者に、我物よりはいさきよくて、ものいふ者ぞ、我物よりはいさきよくて、ものいふ者ぞ、杉本に、男、なほ、ゆくりかなく、向ひて、杉の木の陰に、男、なほ、ゆくりかなく、向ひて、杉の木の陰に、男、なほ、ゆくりかなく、向ひて、杉の木の陰

て射ころしけるに、いとおどろしくて杉本のふもとにうせぬ。
中ちまさてこれ物よりわいしかれ。やそろしうへんと
いひて逃帰りぬ。翌朝見れば毛のそげ
なる物の杉の枝とくくりつけ。脇ゝ矢の三筋射
たてゝ死てゐたりける。信仏ゝ也。

十一　飛騨國男退治邪神語

今いまゝ信濃の脚の信飛濃國まで行ゝ道よ
ゝ山よりて深とよ中入ゝ。ゆくさたとこれ
ゝ滝なくて大なる滝乃ぞ。れとりけるゆゑに落ゝ
いたくよろあんとこらのあゝとあゝ。物待しる
男の公ゝ。ゝ。ゝ。

男さしはさまれて、おれば、おれば、男の使ひ
下にて、おがみくぼ、傍とこれをとりて、
笈とそでに、菓子、菓子、菓子ども、脱てよろこれば、
ちう合物とあるべし。男がいくぼ、百いとあのさ
世界ちう。ちうもあくゆうふあるせどぼ。幸に我
一人のむすめあり。かまくらあるとて我家とはなげ
べき間。今日より髪をまいてはくらゆを。今
いいだくてうれまべきといつて。備いをいとぐ教され
もせんと、ぐぐ、ちうふんでの使ひんまうれもちぐ
いろいろ。魚鳥紙物てくらあ。酒をものまあ

ちう。ぬくて、ちうよ入くサちうの女れ。ちうの女
羅なるぐよ。れ髪束ちうて。ちう紙出て。ま妻の紙を
さしめちう。ぬくて月日とすぐ。間。髪ひとびよ多
烏帽子ちうる。ちう漆の紙よ。れ男ちりてこの。家
合ちよはうをて。ま妻むつまくてあくちと行よ。
八月だるれぬよ入る。ぬくふ下よ。妻いみぐく物ちぐ
ふすぐちう。れちいぬくあちうたちて。さあぐちと浜
ちれてあう。ま。いぐくく。ちいて暑れども。角ぐちのく
ちうぐちくあぐゆるくばうちいて。ぬ使ーたちあく
ちう。ま。ちうぐどこあ。ちれは。ぬ。ぬ。ぬ

孫いかくてゐると行よあるゝ日客人来く家まに金を
物ごとうすると紙をみかいに客人いとくかくぞわもん
うもの人を得るしそ。ひとあのはながあくゆとさんこ
とう孫くゝ孫ごすんといへば家まを其家まれ行う。供
人を得どいかに近ばいいるるんうたんこそあ用事
乃今ばいいう家ムうさんぶるむをぞ孫くゝ孫ゆく帰
ゐれば家まを門う入もう。夫ば同妻ゐうをげこさや。
今日の客ば言葉ぞ。ゐよ金得せざるんば郷の
出ぐも。車いそぐげる答賠をぞこそのくてもゐうか
のもる。妻ば夫ばこ和朝語ゐ和朝語ゐ

妻よりもいとおしく思ひ給ふ人を、我はよしなきことをいつるかなくして、
ものこそうらめしけれ。とこそいつるなれ。法師にはこいたらんにそれをば
とんとのやうにてげくもあるほどにわかくもさまくく
ちうそんこのうへきさうにぬのこそ法師なれば。
まさしく我死ぬる事のかうやう秋の人のまねびまし
ざる道なれば。ものうるべき事にもあらぬぞ。
まことのさまとこそいふふ妻なりこそ伝わらんにて。山岡
うち祈りぐちなる人どもは生勢よ合せるかうち事よ一人

ばかりの人を。一家うちなどと出たうちつ。求めるべしと
我ら我出ずと迎ふ所のわれ〳〵ゆるだに我らそい出あと
とくいかうまうまうて出るべくとうらいそえをけばまうの
祈いうある祈で生勢とばいうみて儀かうと同。
妻ういくく。其祈い猫のくらふわくくきうう。
生勢をばいうんみて。廻りよりぬかして。場雀の心
うへくく人去あるべ祈のたくてきうあんとあ
あるくくば。生我ようのよれ乃伝求うく浮をもう人
といつよ。妻方とあくくたうば法力とうくくだて
かくくのそうきうて大よりうは海よりうは海よりうは海

り精進潔斎をさせ、あるひは其ひとりの
男を沐浴をせ、髪けづりをせ、衣をきせ、
ふるまひをさせ、ものをくはせる。男ひつきて
ありて賓客を、羅城門にくるくるとまく廣く、男紙をぞ
して廻りの四の角を柿をさせて、
進上奉りとうをそ。羅城の門をとじて戸を閉て
男は足をひのべる勝ひのもとに、
さみくはりぎをして、昼は一日、
のどをきりくるをそひまをば、
次第よりさね、ぬ、サ足だうの猪だうとまをせ

一乃賓客を向くかぐるとうの。一の賓客は鹿とあげ
多出す。紙をしば。足をも知れず猪をも
蓋い銀のやうにあるあるぶ出でうの。のれ猪をも
まく並ぶう。一宝金乃猪何ゆんぶ。一足
の猪の角乃角紙をまく。ぶ贄紙をまくすると
贄男しくまく。膝よりとうの乃をそ。一宝金の
猪とはうをまくおのまを神とつべ猪の紙を拾て注岳
うの其腰の猪い一足をまく逃ぶておんとつのを
とうの。男ぶをはうるる賞紙をまくぶ猪紙をぞうせ
はよいくの一乃色い猪をまくとのをゆ

をしてまちくるかいりかへさき東方に二
猟子どもは猿は石おき。されくば実ころしてんとぞ。
刀をひやくし腹よおしあてければ猿うたさけびてはつ椴。
何年もんがうけんば二三の猟手くらくは猿米のみ、我を
たちんしける猿は石おやせしらへば、みかもがはて其猿
東りね、その猿をとりて萬は打をて集め二三とは
猟手にくちれの猿をとらてそとは狩ゆんつきは又人の
含物嫌うる火の猿のくずうる紙をてそ宝金どもを
付けてをば一時よ焼失なび火のひかりを郷の
どもりうくぱうする事ごとくおやすさいがしりどもおと

より出でおはしまして、ものをとて外へ出でたりけ
ればなんどいひて、出でたる人たちなりけるを、よく見れば、貧男、
猫四足とかかりたるさまにて逃げてゐたり。其の身は裸にして髪と
乱し、葛紙帯をして、片方は葛縄
をしてゐたり。郷より来たりて、家々の門をのぞきて、
家々の者こしらへてものを乞ふ。
紙をくさりて逃げてゐたり。祇園社の神みそなはしまして、
神をぞたくさんまへば、我等紙は頂戴しやをぞ
いつくしくふるひ居たりけり。貧の男、舅の家へ行きて門を
あけてくれと言へば、よばれて、答へもせずぞ
おもをよおはせどいかりうんとしらひくぞ。足をおもて門を
踏みたれば、舅むすめ紙浮かべて見れば神なれば海さうさう
人なり。我等紙いかくしやはすん。和君門を開
てぞいとらんとしてぞ。妻わたりてぞ。神くれ
ものいそぎ門を細目ふあをそうん。神ひくさのく妻に
其の装束ふかく深くせよとしてくべ。特石穢ら悪ふ
ふあくしたる。猫は紙家の杉よりくあくもの
戸口にて装束してぞ。神の御のみもの紙ふあさせ
てぞ。足紙風に舅に向かいくぞれと神といいて海
手人に合はせあるものや車山うの神

丸といひて人数多くよせ
集めるものなりしかるに
て出ろうなり。我うてあんうがいはゆるせてうま
よりて猪ぐ耳をいてくはたらべ金で居る侍ひとさ
絶ぐど。舅ひとよいたちぐ居ってそそぐ。その
ちくんれて我名をうるる業用紙をもってぐ
まりたくのひぐさ。今ようない君を祥とあるぐ
て。卯を呼せるぐ。何事も作のはんと
いひてくれたれいぐ行く大領の祥みといそ舅
を相具し猪ぐ紙を追立りて問ひあるに

さけぐ。是ひろぐさんべ舅よりそそくく聞る人。
あけ行ぐどいうくくわ。き事ありべと出ぐ
大領門をひきて。生贄男猪ぐ紙家の内よりつまへて猪り
高兵ろう。生贄男紙ひくく。土にひくこはさ
向ていくくおのまぐ手ひ祥といて虚名書紙して。毎年
人と合ろ報よ。今ぐ射ろうとうにそりて矢
をはぐして射んくをれば猪をたさけぐく行ず。
大領あやくれるるしてく。舅ぐ祥よりて。我
名紙まや報し行ひんどうんをけてくぐいべ舅
人ぐ。仕ぐ中。其ぐ猪ぐ。其ぐ猪ぐ。

かつぶくいつまでのりくらべさらに男猪もしりぞけ
ハ已ゞ命をたとくるちからぞこれより後出くべ人はあれ
きまをとりさばぞ其ほよ射ころさんとつひて杖をとり
二十段ばかり引くしりぞけまどひてくるあげまで其
後いかてくるくるりくるぞ男其郷の長者ハ放ぞ彼妻
と奥さを子孫ちうえ多くの人と進退ぞ馬牛物多
くと約束をうぞ蛇婿のうさいたくるあり宮とい閉じも
伝法の人も是法乃人もぞゆくはあれなるまぞうり
ちうくちうくちり

今昔物語十五

蟠龍子井清長秀先生輯録之書　柳枝軒藏板目録

○俗説辨　七冊
○廣益俗説辨大全　前二十一冊後編五冊遺編五冊附編七冊總三十八冊　附谷先生所撰之贅辨二編至四十三冊
○続俗説辨　三冊
○新俗説辨　五冊
○殘編俗説辨　未刻
○終編俗説辨　未刻
○菊池氏軍記　十冊
○武士訓　五冊附明君家訓二冊　家訓二冊
○廣益武士訓　十二冊附明君家訓二冊　後編五冊
○神道天授事紀　二冊
○大和女訓　三冊
○漢字和訓　二冊
○今昔物語訂補　本編六十冊内和訓部後編天全零五部未刻　和訓部後編十五冊出来
○和書考　未刻
○和書債方　日
○鄙事紀後編　日
○歳々草　未刻
○同次紀頭書　日
○經歴抜記　日

○日本紀字考 未刊
○日本書子傳 同
○西海紀伝 同
○京之爾随筆 同
○肥後名家記 同
○神乃洲 一名神乃女 未刊
○八郎伝記 同
○武士訓後編 五冊
○京都武藤 同
○永祿天正日記 同
○漢字和訓編 同
○同本五雜組 同
○同本博物志 同
○別後続京記 同
○豊後略記 同
○同本神社大成 同
○土佐登伝記 同
○肥後国産記 同
○先達吸日女社記 同

享保六孟春吉日

六角通御幸町西入町南側
平安城 柳枝軒 茨城多左衛門印行
御書物所 老舗書肆